

# こがけんさん

[お笑い芸人]



## 目立ちたくはないけど 表現したい!? 小学生時代

小学生の頃は、どちらかと言えばおとなしめ。だけど、ちょっと変わった遊びを考えたりするのは好きでした。

例えば、休み時間にクラスの隅にいる地味な子たちを集めて、その頃流行っていた「仮面ライダー」の役を1人ずつ与えて演じてもらう。僕は監督兼演出係です。敵役がいなくて、全員がヒーロー役なので、みんな喜んでやってくれました。小学2、3年生の頃かな。あとは絵を描いたりするのが好きでしたね。

自分で何かを考えて表現することが好きでした。ただ、音楽でも絵でも、何か表現はしたいけれど、決して目立ちたいわけじゃなかったです。

矛盾しているように感じるかもしれませんが、それは昔も今も変わらないです。

## 「場合の数」のわからなさに トラウマ並の衝撃を受けた

小学生の間は、学校のテストはほとんど95点くらいの得点が取れていたと思います。「特別に頑張らなくても、ちょっとまじめにやれば点数は取れる」という感覚をもっていました。

ですが、「場合の数」を習ったとき、大きな壁にぶつかりました。それまでの勉強は、計算の仕方や漢字の書き順のように、間違えたところがすぐにわかって、そこをやり直しさえすれば答

えが出るものだったのに、いきなり高度なものを要求された気がしたんです。いまだにそのときの「わからない!!」という感覚は、トラウマのように残っています。苦手意識を植えつけられて、それから算数だけは、時間をかけて復習をていねいにする習慣ができました。

## 2人の姉から影響を受けたことが 今の仕事にも結びついている

僕には、10歳と12歳年上の2人の姉がいます。姉たちには、小さい頃大いに影響を受けました。

2番目の姉は、自分でミックステープ（正規のアルバム以外の比較的自由にまとめた音源集）を作り、クラスで売ってお小遣いを稼いでいたほどの洋楽好き。僕は小さい頃から、姉の好きなジャンルの曲や当時のビルボード（米国の有名な音楽チャート。全米チャートとも呼ばれる）のトップ20にランクインしているメジャーな曲まで、まんべんなく聴かせてもらっていました。

姉が教えてくれる映画やファッションなど、いろんなものを吸収するのが楽しくて、そんな姉たちに追いつきたいという気持ちをもっていました。

みんながあこがれる人って、例えば見た目が良かったり、足が速かったり、目立つ長所があると思うんですけど、僕は姉を見ていて「たくさん情報をもっている人の周りには、みんなが近づいてくるんだな」と気づかされ、自分もそうなると思いました。

今、映画や音楽に関係する仕事にたずさわることができるのは、そんな経験があったからだと思います。

## 自分を大切にできるように 子どもには寄り添ってあげたい

僕はずっと親に家業（創業100年超の人気居酒屋）を継ぐんだと言われて育ってきて、だんだん自分の気持ちを表に出さなくなっていくたし、「跡を継がなかったら、自分の存在価値はないのかな」と思い詰めたこともありました。

だから僕は、子どもがしたいことや、やりたいことを否定したくないと思っています。また、何をやるにしても、勝ち負けや上手い下手ではなく、そのこと自体を楽しんでほしい。例えば絵を描いたときも上手に描けたかは問題ではないので、「上手だね」とは言わないようにしたい。でも、つつい言っちゃう時もある（笑）。そして、描けたことには喜んで、「こうやるとうまく描けるよ」とは教えないです。

絵にはその人のスタイルがあって、誰もが同じ答えを出せる数学の公式とは全く違います。他人が手を加えないことで、その人独自のタッチが出てくるかもしれませんから。

自己肯定感が低いと生きづらい。だから、子どもにはとにかく自分を大事にしてほしい。子どもの気持ちにうまく寄り添えたらいいと思うんです。子どもとはいえ思考は複雑。うつろう気持ちをうまく汲み取ってあげたいですね。

## PROFILE

1979年生まれ、福岡県出身。慶應義塾大学商学部を卒業後、有名進学塾で講師を務めた経験をもつ。2019年R-1グランプリ決勝進出。同年、おいでやす小田のお笑いユニット「おいでやすこが」を結成して、2020年M-1グランプリに出場し準優勝。歌ネタ王決定戦2020でも決勝進出。どんな曲でも洋楽ロック風に歌うのが得意。映画PRイベントや、芸人を休業して板前修業した経験を生かした食レポなど、多方面で活躍中。

**僕は自己肯定感が低かった。だからこそ、  
子どもの気持ちを最大限に尊重したい。**